

## イブニングセミナー4

# 皮膚バリアのケア： アトピー性皮膚炎等における実践

日時 2021年4月24日(土) 18:05～18:55

会場 帝国ホテル東京 第4会場【本館3F／扇の間】

共催 第37回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会  
NAOS JAPAN株式会社 ビオデルマ事業部

座長

戸倉 新樹 先生 浜松医科大学 細胞分子解剖学講座



皮膚バリアの障害は種々の疾患で見られるが、コロナ禍での日常診療においてその重要性は以前にも増している。アトピー性皮膚炎患者では、手洗いが増えて湿疹が悪化している。またマスクで被われた部位での皮膚炎が増悪しており、的確な対処が求められる。これらを治療及びスキンケアという観点から、実践的解説をしていただくのが本セミナーの意図するところである。

演者①

千貫 祐子 先生 島根大学 皮膚科学講座 准教授



### スキンケアでアレルギーマーチを防ぐ！

「アレルギーマーチ」は、「アレルギー体質を有するものにおいて、原因(抗原)と発現臓器(疾患)と発症時期を異にししながら気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、アレルギー性鼻炎などのアレルギー疾患が次から次へと出現してくる現象」とされている。この概念は国内だけではなく広く世界的に認められ、海外では「atopic march」とも呼ばれている。近年ではアレルギー疾患の発症が低年齢化している傾向にあり、提唱された当時のアレルギーマーチとはその実態が微妙に異なっているとも言えるが、標的となる臓器が皮膚から気道に、また感作アレルゲンが食物から吸入アレルゲンに変わっていくというパターンは基本的に変わっていない。そして、アトピー性皮膚炎が最も「アレルギーマーチ」の起点になりやすいと考えられている。湿疹(炎症)が起きてバリア機能が低下することで様々な食物が体に侵入し、IgE抗体が作られてアレルギー反応が起きやすい状態になる「経皮感作」という考え方も、この10年で随分と浸透してきた。つまり、アレルギーマーチの進行予防のためには、アトピー性皮膚炎のコントロールが最も重要と思われる。アトピー性皮膚炎のコントロールにおいて、抗炎症外用薬を用いたプロアクティブ療法の有用性は言うまでもないが、近年では市販の保湿クリームが皮膚バリア機能の回復に寄与する可能性や、痒み止めスプレーがアトピー性皮膚炎の痒みを減少させ、QOLを改善させる可能性についての研究報告などもみられる。本講演では患者参加型のスキンケアによるアレルギーマーチの予防法について紹介する。

演者②

野村 有子 先生 野村皮膚科医院 院長



### ドライスキンを見直す ～かゆみを軽減させる・バリア機能を回復させる～

ドライスキンは、日常診療でしばしば遭遇する。乳幼児から高齢者まで幅広い年代に認められ、特にアトピー性皮膚炎や老人性乾皮症では強いかゆみを伴う場合も多い。またコロナ禍において、誤った消毒方法や過度な手洗いにより、ドライスキンがさらに悪化している例が多く見られる。マスクトラブルも見逃せない。マスクをしているから保湿は不要と思い、皮膚炎を生じてくる例もある。さらに、正しくマスクを着用できていない例も多い。正しい手洗いや正しいマスク着用など、日頃のスキンケア指導の重要性が再認識される。そこで「かさかさかゆかゆ」対策をもう一度見直してみたい。かゆみを少しでも早く軽減させること、そしてドライスキンを繰り返さないためにバリア機能を回復させることについて、スキンケア指導のノウハウを含めてお伝えしたい。そして一人でも多くのドライスキン患者のお役に立ちたいと思う。